

オープンイノベーション機構の整備事業
令和6年度終了評価 評価結果

採択大学名：神戸大学

1. 評価結果(A)

期待どおりの成果が得られており、大型共同研究等の組成・運営等に向けた産学連携マネジメントとして、今後も十分な活動が期待される。

2. 評価所見

・運営体制

重点分野ごとに領域に精通するプロジェクト CM と、技術移転 CM、事業展開 CM、法務 CM、知財 CM を配置し、プロジェクト組成に向けた分野間の情報共有、進捗管理を定期的に欠かさず行うことで、OI 機構が大型共同研究を一体的に支援できる環境を整えた。産学連携本部と外部組織である株式会社神戸大学イノベーション(KUI)との連携により、OI 機構の機能を段階的に KUI へ移管することを計画し、実行したことは挑戦的な取組といえる。KUI と産学連携本部がアンダーワンルーフで一体となり、クリエイティブ・マネージャー(CM)と URA の協調による部局長訪問や、教授会において OI 機構の役割、活動を発信することで、外部組織でありながらも、大学と一体的に産学連携活動を推進するマネジメント体制を整備することができた。

・研究運営

OI 機構では、「医療技術・機器開発」、「バイオ工学」、「スマートコミュニティ」、「海事・エネルギー」の4つを重点分野として、各分野にプロジェクト担当 CM を配置し、大型共同研究創出に向けた活動を展開した。個々の活動を積み上げる中で、次の3つの CM 行動モデルを確立し、各分野において大型の共同研究組成を実現することができた。

- ①主導・創出型モデル: CM 自らが繋がりのある学内の研究者をチーミングしプロジェクトを組成
- ②組織参画型モデル: 大学の研究者が立ち上げた研究コンソーシアムに、CM が企画アドバイザーとして参画し、各社の企業ニーズや課題を収集して個別のプロジェクトを組成
- ③包括連携型モデル: 学長と企業トップとの面談後、CM が包括連携担当副学長と相談のうえ、候補研究者を抽出し、企業と候補研究者を引き合わせ、CM を交えて共同研究を具体化。また、人文社会科学系の研究者を取りこむことを OI 機構が企業に対して提案し、異分野融合型の共同研究も組成。

・資金調達

事業初年度こそ目標値とほぼ同額の実績であるが、2年目以降はいずれも目標を上回る資金調達を実現した。全 CM が参加する CM 連絡会を毎週開催し、大型共同研究にフォーカスした「ヨミ表」を用いて、進捗状況の共有と組成に向けた具体性のある議論を積み重ねてきたことで、

案件の実現度を高めた。これらの取組を OI 機構が徹底することで、大型共同研究の件数及び収入額を着実に増加させながら、計画以上の資金調達実績を挙げたことは高く評価できる。また、OI 機構の活動を契機として、2022 年度に間接経費比率を従来の 10%から 30%に改定し、OI 機構が関与する共同研究は間接経費の一部を OI 機構の自立的経営に配分することを制度化し、自立的経営財源の確保につなげた。

・大学改革

研究者の人件費を共同研究費から支出し、学内財源から当該研究者へ賞与として一部還元する「PI 人件費」と、共同研究組成に貢献した CM の対価を企業に求める「CM マネジメント経費」の制度を、大学執行部との密な連携により制度化した。これらの制度は、研究者及び研究者を支援する CM の産学連携に対する意欲向上と、全学の産学連携が進むシステム改革をもたらしており評価すべき点である。

その他、OI 機構が取り組む4つの重点分野の研究プロジェクトを全学的な取組へ発展させる全学研究センターの設立に貢献した成果も認められる。

・今後の展望

OI 機構の機能を KUI へ移管したことで、株式会社としての裁量度を活かしながら、専門性、機動性、柔軟性に富んだ産学連携活動の更なる発展が期待できる。一方、KUI と大学関係組織との距離や KUI 構成員の個人の力量に依存する運営体制などの課題も懸念される。今後、これらの課題を認識しつつ、学内関係組織と KUI とが一体的な活動を推進するガバナンス体制を構築・強化しながら、外部法人を活用した産学連携の成功モデルを実現することを期待したい。